

【経営概況】

1 経営形態
肉用牛 繁殖経営

2 構成(労働力)
本人、妻、長男

3 飼養頭数
繁殖雌牛 80頭

4 飼料作物
夏 作：ソルゴー 1ha, 野草 8ha
冬 作：イタリアンライグラス 9ha

5 経営の特徴
・昼夜分娩技術(1日1回給与)や年間ロール体系、哺乳ロボット等の省力化技術を積極的に導入し、多頭飼育経営を実現している。
・飼料収穫作業や水稻田植作業を受託し、収入の安定化・確保を図っている。また、パソコン複式簿記や経営診断の受診等により、経営管理の徹底を図っている。

6 今後の目標
・子牛の事故防止と商品性(販売単価)向上を図り、収益性の高い繁殖経営を実現する。

繁 - 14

【経営発展の経過】

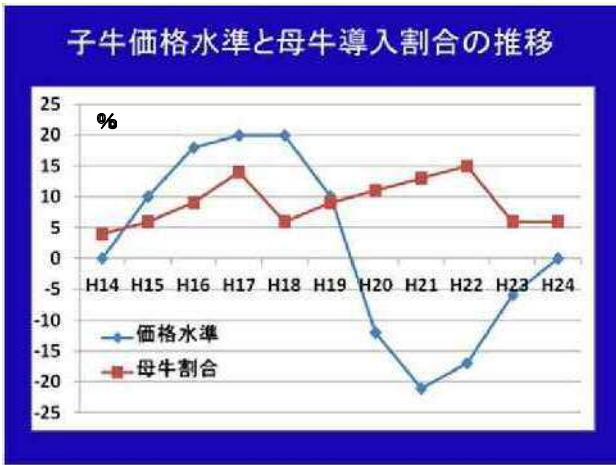
【キーワード】

計画的な規模拡大、飼料収穫作業受託
省力管理システム(哺乳ロボット)

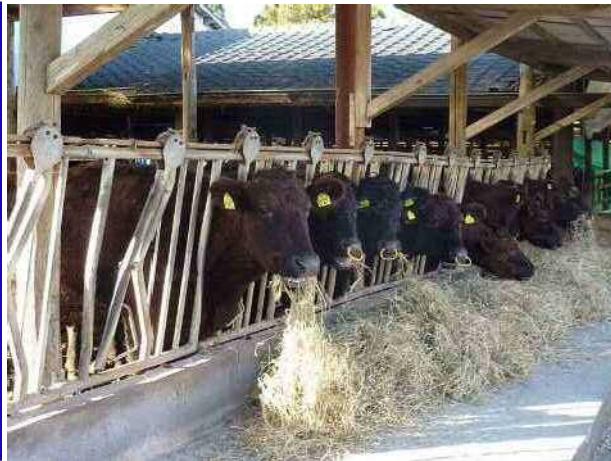
S45年 経営主就農(18才。就農時の経営作目は、水稻、甘藷、麦)
S50年 町単独事業を活用して、繁殖雌牛10頭規模の経営を開始
S50年代には、一貫経営に取り組んだ時期もあったが、繁殖専門経営を志向し、自家保留を中心に規模拡大を図る。
H10年 連動スタンチョン設置
H13年 繁殖雌牛60頭、水稻作業受託150a
H15年 パソコン複式簿記記帳開始
H18年 哺乳ロボット導入
H19年 後継者(長男)就農
H20年 家族経営協定締結(経営主夫婦+長男)
H22年 繁殖雌牛80頭、飼料収穫作業受託500a、水稻作業受託100a
現在に至る

【経営発展の過程で苦労した点】

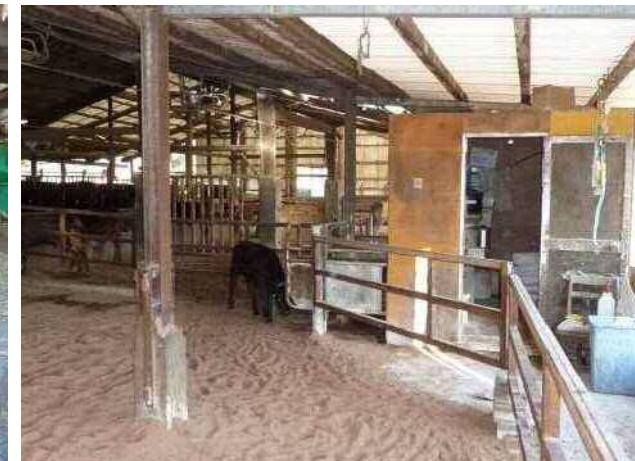
・多頭化により生じた粗飼料不足や子牛事故の発生には苦労した。借地やロール体系の導入、消毒の工夫等により、改善に努めた。
・子牛相場の変動から不安定になりがちな所得の安定化にも苦労した。子牛価格の安い時期には露地野菜(ゴボウ等)の栽培にも取り組んだ。水稻田植や飼料収穫作業の受託にも長年取り組み、現在も行っている。
・所得の安定化や資金繰りの改善が進むにつれ、計画的な保留や子牛価格が安い時期の増頭もできるようになった。



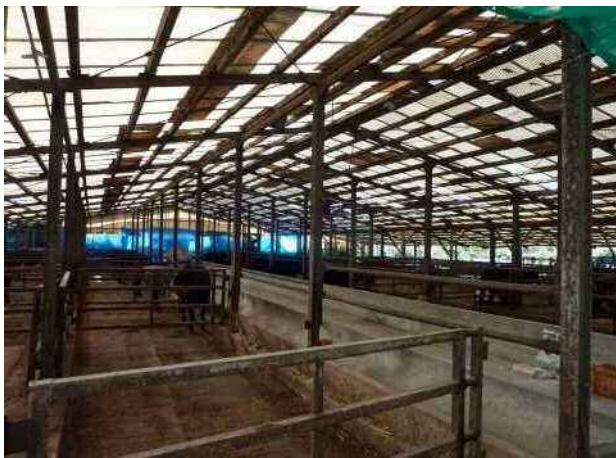
計画的かつタイミングをとらえた増頭
計画的な保留・導入により、頭数維持を図るとともに、子牛価格が安かった時期は拡大のチャンスととらえて増頭している。



省力化技術等の積極的な導入1
連動スタンチョンや昼間分娩技術(1日1回給与)をいち早く導入し、管理の省力化を図っている。



省力化技術等の積極的な導入2
哺乳ロボットの導入により、ほ乳作業の省力化を実現
早期離乳により、母牛の繁殖成績も良好な水準を維持している。



省力化技術等の積極的な導入3
旧肥育牛舎(採光性牛舎)を活用し、生産牛経営を拡大群管理を行い、生産性の向上を図っている。



周辺農家の飼料収穫作業受託
周辺高齢農家の牧草収穫作業を長年受託
地域の生産維持や自身の経営安定化につながっている。



ロール給与体系の採用
多頭化により、粗飼料不足が生じたが、
借地やロール体系の採用により、改善を図った。

【経営概況】

- 1 経営形態
肉用牛 繁殖経営
- 2 構成(労働力)
夫婦2名 パート半年1名
- 3 飼養頭数
繁殖雌牛85頭
- 4 飼料作物
夏 作:ローズグラス(永年)6ha, バヒアグラス(永年)4ha
冬 作:イタリアン4ha
きびトップ:精脱トップ(セビ)2t/1台/日(12月~4月上旬)
稻わら:WCS1.7ha

5 経営の特徴

- ・分娩監視システムによる分娩事故防止対策
- ・細霧装置設置による子牛損耗防止対策
- ・子牛4ヶ月齢までは粗飼料無給与・濃厚飼料多給型飼養により子牛商品性向上に取り組んでいる。

6 今後の目標

- ・繁殖雌牛100頭経営の確立。
現在、日本短角種を東北より1頭導入。将来、赤肉重視の肥育経営もチャレンジしたい。

繁 - 15

【経営発展の経過】

【キーワード】
事業活用、自給飼料確保
省力管理システム(哺乳ロボット、分娩カメラ)

- | | |
|---------|---|
| S57年 | Uターンにより施設園芸で営農を開始
台風被害により肉用牛に転換 |
| S60年 | 父親より経営移譲。肉用牛4頭を譲り受ける。
地元製糖工場に勤めるかたわら徐々に頭数を増やす。 |
| H元年 | 後継者育成資金で30頭規模の牛舎を建設 |
| H10年 | 飼養頭数25頭に拡大。
繁殖導入事業、自家保留、JA預託を活用 |
| H13~14年 | 牛舎建設 |
| H21~22年 | 畜産基盤再編総合整備事業で牛舎、農機具、堆肥舎を整備 |

【経営発展の過程で苦労した点】

- | |
|--|
| ・増頭当時の種子島では大規模経営の技術が確立しておらず、技術面で苦労した。技術の習得のため、種子島の大規模酪農経営における乳牛の飼養管理を学んで肉用牛の飼養管理に応用した。 |
| ・規模拡大後は、当農場が島内で一番の大規模経営となったことから、島内に参考になる農場もなかった。そのため、自分で情報を収集して飼養管理を確立した。 |



細霧システムの活用



分娩監視カメラの活用



WCSを積極的に活用

繁 - 16

【キーワード】

事業・資金活用、後継者、段階的規模拡大
省力管理システム(哺乳ロボット、分娩カメラ)
衛生対策(細霧装置)

【経営概況】

- 1 経営形態
肉用牛 繁殖経営
- 2 構成(労働力)
本人、妻
- 3 飼養頭数
繁殖雌牛90頭
- 4 飼料作物
夏 作:トウモロコシ 8ha, スーダングラス 2ha
冬 作:イタリアン+エンバク混蕃 10ha
- 5 経営の特徴
・哺乳ロボット、細霧装置を有効活用し、早期離乳・労力軽減を実現
・病気治療より予防に重点を置き、ワクチンプログラム・細霧装置を活用した飼養管理を実施
・資金や補助事業を活用しながら簿記機長により経営状況を把握し、段階的に規模拡大を実施
- 6 今後の目標
・繁殖雌牛100頭経営の確立のため、子牛育成牛舎の増設、雇用確保によるゆとりある経営を目指す。

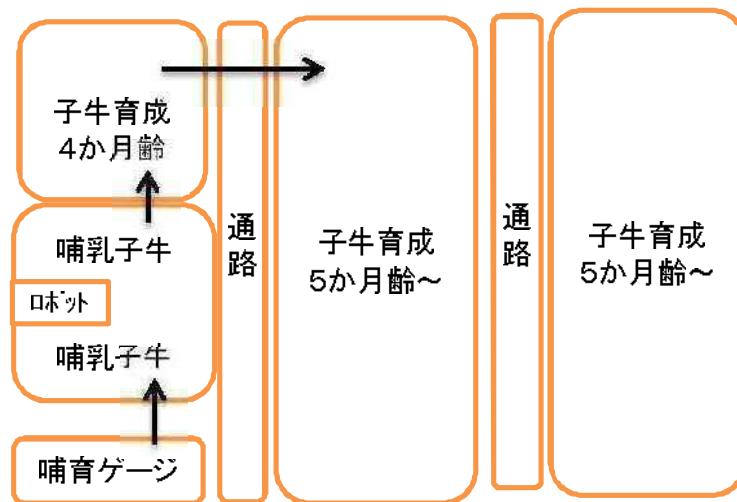
【経営発展の経過】

- | | |
|--------|--|
| H元年 | 農業大学校卒業後、派米研修へ |
| H3年 | 父経営(繁殖牛30頭+預託肥育100頭)の後継者として就農 |
| H4年 | 農業改良(後継者)資金により、繁殖素牛15頭を導入。
牛舎は自己資金で整備 |
| H6~21年 | 加工バレイショ(1.5ha)栽培開始
繁殖部門を経営移譲され、青色申告開始 |
| H8年 | 畜産振興資金で繁殖素牛20頭を導入 |
| H9年 | 早期離乳で人工哺育を開始 |
| H11年 | 近代化資金で繁殖素牛40頭を導入し、繁殖雌牛60頭に規模拡大 |
| H15年 | 近代化資金・補助事業で子牛育成牛舎・堆肥舎設置 |
| H16年 | 哺育牛舎を増設し、哺乳ロボット・細霧装置を導入 |
| H19年 | 近代化資金で繁殖素牛20頭を導入し、繁殖雌牛80頭に規模拡大 |
| H20年 | 肥育預託部門中止し、繁殖経営に一本化 |
| H21年 | 分娩監視カメラを導入 |
| H22年 | 県指導農業士に認定され、新規就農者等の育成支援 |
| H25年 | 人工授精(自家用)開始 |

【経営発展の過程で苦労した点】

- | |
|--|
| ・農大卒業直接就農せず、将来の肉用牛経営に役立てるため派米研修制度に2年間参加した。 |
| ・増頭で子牛の下痢が多くなり、対策として早期離乳を取り入れたが、今度は呼吸器病が蔓延したため細霧装置による消毒を行いなんとか改善を図ることができている。 |

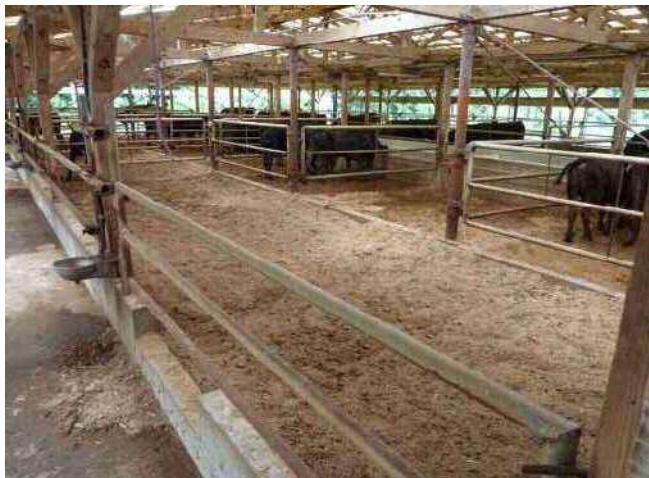
□ 哺乳～出荷までの流れ



□ 哺乳子牛舎



□ 子牛育成牛舎



□ 細霧装置で衛生対策



□ 石灰による牛舎消毒



【経営概況】

- 1 経営形態
肉用牛 繁殖経営+露地野菜
- 2 構成(労働力)
夫婦、後継者2名(肉用牛部門、露地野菜部門)
雇用(常時、臨時)
- 3 飼養頭数
繁殖雌牛95頭、安納いも8ha、ばれいしょ3ha
- 4 飼料作物
夏 作:ローズグラス5ha、飼料用サトウキビ2.4ha
冬 作:イタリアンライグラス2ha(田)
イタリアンライグラス8ha(畑)
稲わら:なし
- 5 経営の特徴
 - ・肉用牛部門と露地野菜部門のそれぞれについて、後継者2名に責任を持たせて役割分担をさせており、主体性を持った飼養・栽培管理体制となっている。
 - ・規格外の安納いもを肉用牛の飼料に活用して低コスト化を図る一方、肉用牛部門から出る堆肥を露地野菜部門で活用しており、経営内耕畜連携を実践している。
- 6 今後の目標
飼養規模100頭を維持。受胎率や子牛商品性の向上によって収益を高める。

繁 - 17 【経営発展の経過】

【キーワード】
複合経営、未利用資源活用、後継者確保

- | | |
|--------|--|
| S43年～ | 高校卒業後就農
露地野菜、さとうきび(4～5ha) |
| S46年 | 後継者育成資金借入(機械導入) |
| S59年 | 肥育牛経営をスタート(20～30頭規模:JAプロパー資金活用)
自力施行による牛舎建設 |
| H元年～ | 繁殖経営へ経営を転換 |
| H6～7年 | 畜産基盤再編総合整備事業での場整備、機械倉庫
飼料収穫機械(コーンハーベスター、細断型ロールベーラー)導入 |
| H7～8年 | 自己資金で牛舎建設(50頭規模) |
| H12年 | 安納いもの栽培を開始 |
| H19年 | 現在の規模に至る |
| H27年1月 | 法人設立 |

【経営発展の過程で苦労した点】

- ・規模拡大における資金面で苦労した。
- ・繁殖経営、安納いもの栽培をスタートした当初は飼養管理、栽培管理の技術面で苦労した。
- ・苦労したことが多かったが、農作業の苦労ばかりではなく、種子島はスポーツ活動(バレーボール)が盛んであることから、子供達と共に地域活動を楽しんできた。その結果、後継者は島外へ出ることもなく就農してくれた。
- ・今後は地域の肉用牛生産基盤の弱体化が懸念されるので、生産団地等を整備して新規に就農できるようなシステムができれば、経済的負担も少なく基盤維持が出来ると思われる。



規格外安納いもの活用



手作り子牛牛舎(元は肥育牛舎)



飼料用サトウキビの活用



ビールケースを活用した子牛用飼槽

繁 - 18

【経営概況】

1 経営形態
肉用牛 繁殖経営

2 構成(労働力)
本人、雇用0.5名 計1.5名

3 飼養頭数
繁殖雌牛:100頭

4 飼料作物
夏 作:ローズグラス 3ha
冬 作:イタリアン10ha
稻わら:10ha, WCS用稻:2.5ha

5 経営の特徴
・地域に密着し、地域の稻わら、水田での裏作等を最大限に活用した低コスト経営を目指している。
・肉用牛情勢に応じて、育成牛販売、肥育牛販売等を経営に取り入れたり、簿記記帳及び経営及び資金管理を自ら行う等の方法により、資金(自己及び借入)の回転を重要視した経営を目指している。

6 今後の目標
・繁殖雌牛100頭経営の確立のため、飼養管理、自給飼料確保の効率化を図る。

【経営発展の経過】

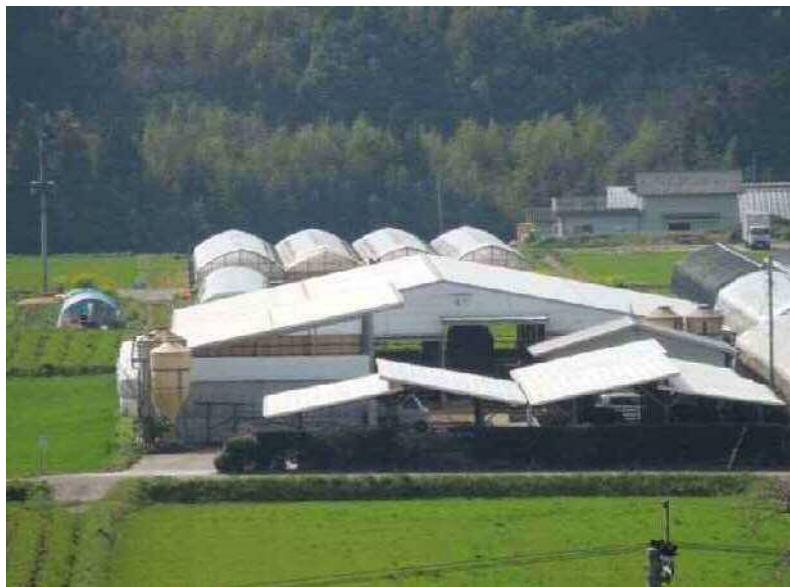
【キーワード】

段階的規模拡大、事業・資金活用
資金繰り重視、共同利用施設、情報交換

S63年～ 農業大学校卒業→派米研修(S63年)→農協就職(H2年)
H6年 父経営(牛6頭+トマト+水稻)の後継者として就農
地区外畜産経営体での研修(6年間)、人工授精業務開始
H7年 農業改良(後継者)資金により、30頭規模牛舎及び繁殖雌牛30頭を整備
集落機械利用組合活用による飼料生産。オペレーターを開始
H10年 育成牛畜舎を整備し、繁殖雌育成牛の販売を開始
H12年 近代化資金により、繁殖雌牛50頭に規模拡大
降灰対策事業により、飼料調製用機械一式を整備
子牛のキャトルセンター預入れを開始
H15年 地域の若手畜産農家3名で、畜産若手部会を発足
H21年 畜産基盤再編総合整備事業により、100頭規模牛舎を整備

【経営発展の過程で苦労した点】

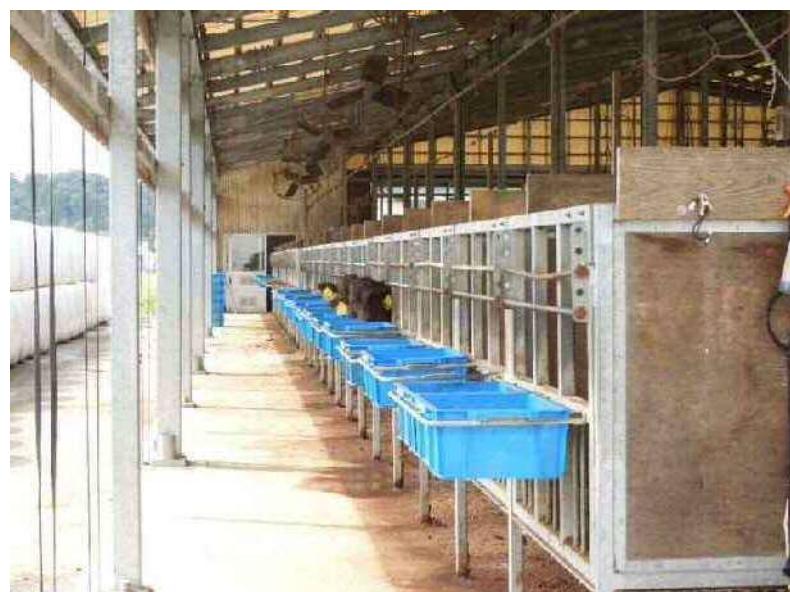
・就農前後約2年半の期間、技術レベルの高い効率的な経営手法を学ぶために、米国やA農家で研修した。
・経営開始当初の収入が少ない3年間は、地域畜産農家の手伝い、アルバイト、人工授精等を行い、収入確保に心掛けた。
・規模拡大に伴うイニシャルコストの低減のために、キャトルセンター活用や機械の共同利用に努めた。
・若手部会発足など仲間作りによる情報収集に努め、効率的な経営手法等を学習してきた。



牛舎全景



就農当初の牛舎(放飼, スタンチョン)



新牛舎(高床哺育ゲージで衛生的な管理)



新牛舎(広い飼槽兼通路で作業性を向上
2段カーテンで換気と保温の調整が可能)

【経営概況】

- 1 経営形態
肉用牛 繁殖経営
- 2 構成(労働力)
夫婦、後継者
- 3 飼養頭数
繁殖雌牛100頭
- 4 飼料作物
夏 作:ロースグラス(永年)3ha, パヒアグラス(永年)12ha
トウモロコシ0.8ha, 飼料用サトウキビ0.3ha
冬 作:イタリアンライグラス16ha
(パヒアグラスに追播12ha, エン麦と混播4ha)
稲わら:WCS
- 5 経営の特徴
 - ・長期貯蔵が難しいサトウキビトップをミキサーで細断し、細断型コンビラップでサイレージ調製することで、長期貯蔵が可能となり自給粗飼料の確保が大幅にアップした。
 - ・家畜ふんは町営堆肥センターに搬入することにより堆肥の切り返し作業等の労力を削減
 - ・発情発見装置及び繁殖管理ソフトを活用し、後継者が授精業務を担う
- 6 今後の目標
繁殖牛を150頭まで増頭。

繁 - 19

【経営発展の経過】

【キーワード】

事業・資金活用、自給飼料確保
後継者確保、情報交換

- S47年 島外の農業高校卒業後、2年間島外で就職
S49年 帰島し父経営(牛15頭)の後継者として就農
S52年 結婚を機に経営移譲を受け経営開始
S54年 農地購入(土地取得資金)
H 3年 自己資金で牛舎整備
H15年 スーパーL資金による牛舎整備
H20年 後継者就農
畜産基盤再編総合整備事業による牛舎整備(スーパーL資金)
スーパーL資金による子牛育成牛舎整備
家族経営協定締結
H25年 畜産基盤再編総合整備事業による飼料調製施設整備
(スーパーL資金)

【経営発展の過程で苦労した点】

- ・経営開始当初は子牛の事故・疾病が多く収益が上がらなかった。後継者就農後は観察力や飼養管理が向上し子牛事故は殆ど発生しなくなった。
・本人は指導農業士、経営者クラブ会員として、妻は女性農業経営士、農村女性グループ会員として、また、後継者は青年農業士、農業青年クラブ会員として常に効率的な経営手法等の習得や情報収集に努めている。



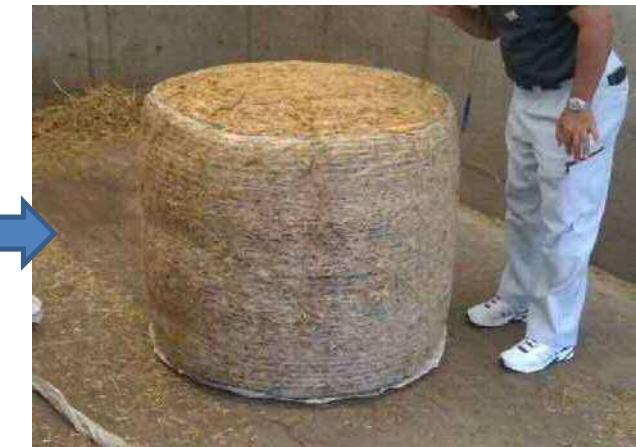
飼料用サトウキビ収穫



飼料用サトウキビを
ラップサイレージ化



サトウキビ精脱トップの利用



サトウキビ精脱トップとWCSをミキサーで細断後ラップサイレージ化

繁 - 20

【経営概況】

1 経営形態
肉用牛 繁殖経営

2 構成(労働力)
本人、妻、長男 3名

3 飼養頭数
繁殖雌牛 110頭(本人 80頭、長男 30頭)

4 飼料作物
夏 作: 6ha(ローズグラス、ヒエ)
冬 作: 14ha(二毛作活用、イタリアン)

5 経営の特徴
・子牛キャトルセンターを活用し、繁殖雌牛の増頭を図った。
・人工哺育の導入(高床カーフゲージ)
・自給粗飼料に加え、堆肥交換による稻ワラ収集により、母牛用の粗飼料自給率100%の低コスト経営
・本人、妻、長男の役割分担を明確化(分業制)
・本人は人工授精師として活動

6 今後の目標
・繁殖牛120頭規模(分娩牛舎、子牛牛舎の増築を計画)

【経営発展の経過】

【キーワード】
事業活用、耕畜連携による自給粗飼料確保
キャトルセンター利用(規模拡大)

S53年	Uターンにより就農(繁殖牛5頭程度飼養)
S56年	人工授精師免許取得
S59年	牛舎建設(生産牛15頭)
S60年	結婚を機に増頭を計る
H7年	牛舎建設(スタンチョン整備、繁殖雌牛28頭→45頭規模へ増頭)
H10年	人工哺育技術を導入(カーフゲージ10基を導入:事業活用) →JA子牛キャトルセンター(カーフキャンパー)の利用を開始 →繁殖雌牛65頭へ規模拡大
H21年	長男が就農
H22年	牛舎建設(長男就農による事業活用) →繁殖雌牛100頭へ規模拡大

【経営発展の過程で苦労した点】

- ・人工哺育技術を導入したことでの、早期母子分離が可能となり、1年1産を実現することができた。
- ・子牛価格低迷時期に規模拡大を図り、施設不足部分についてはJAの子牛育成事業を活用し、キャトルセンターに飼育管理を委託することで、経営を安定させた。
- ・増頭は自家保留を中心に、JAと市の家畜導入事業を活用することで、効率的に行うことができた。
- ・周囲の稲作農家と連携した、堆肥交換により自給粗飼料の確保を行うことで、生産コストの低減に努めた。



繁殖牛舎(新)



繁殖牛舎(旧)



分娩舎



哺育ゲージ(バケツによる飼料給与)



防寒対策(カーフジャケット)



育成牛舎(育成後半はキャトルセンター利用)

【経営概況】

1 経営形態
肉用牛 繁殖経営 + 運送業務

2 構成(労働力)
夫婦2名、後継者2名

3 飼養頭数
繁殖雌牛116頭

4 飼料作物
夏 作:ローズグラス 3ha, バヒアグラス(永年)2ha
冬 作:イタリアン+エンバク 12~13ha
稲わら:WCS25ha

5 経営の特徴
・地域に密着し、地域のWCS、甘しょの裏作等を最大限に活用した低成本経営を目指している。
・コンクリート電柱や木材の自己調達等により低成本牛舎を建設による低成本経営を実践している。
・さとうきび収穫時期(12月~4月)はさとうきび運送業務を行い、農外収入を得ることで経営の安定を図っている。
・就農当時から業務記録を行っている。

6 今後の目標
・H27年1月に60歳を期に後継者へ経営移譲。
自給飼料を確保しながら200頭規模を目指す。

繁 - 21

【経営発展の経過】

【キーワード】

事業・資金活用、低成本牛舎、自給飼料確保
資金繰り重視、後継者確保

S50年	高等農研修所卒業後就農 6~7頭規模で経営開始 増頭は徐々に実施
S54年	結婚
S58年	後継者育成資金で30頭規模の牛舎を建設
S60年	後継者(次男)誕生、補助事業を活用して飼料収穫機械一式を導入
H2年~	定置網漁を開始し、収入拡大を図る。
H18年	後継者結婚、漁業から畜産へ経営体系をシフト 銀行融資(公庫窓口)により生産素牛8頭導入 畜産基盤再編総合整備事業で子牛牛舎、哺育ロボット、機械導入
H20年	JA資金を活用して6頭導入、牛舎増築 50~60頭規模達成
H24年	さとうきび運送業務開始
H26年	80頭規模の低成本牛舎建設 100頭規模を達成
H27年	後継者へ経営移譲

【経営発展の過程で苦労した点】

- ・子牛の死亡事故が資金繰りに影響を及ぼすため苦労した。
- ・TMRミキサー導入により省力化ができた。機械は将来の計画を見据え大きい規格のものを導入することで、余裕のある作業が可能。
- ・これまで、高い将来像を持って進んできた。5年先、10年先を見越して、かつ夢を見ないと前に進んで来られなかつた。
- ・時間はかかるが、後継者に責任を持たせて任せることが大切。



WCSの活用



放牧を活用した低コスト・省力化技術



電柱を活用した低コスト牛舎



繁 - 22

【経営概況】

1 経営形態
肉用牛 繁殖経営

2 構成(労働力)
夫婦2名、後継者夫婦2名

3 飼養頭数
繁殖雌牛：本人95頭、後継者25頭

4 飼料作物
夏 作：ローズグラス+バヒアグラス(永年) 8ha
冬 作：イタリアン4ha
きびトップ：精脱トップ(セビ) 2t/1台/日(12月～4月上旬)

5 経営の特徴
・地域に密着し、地域のきびトップ、甘しょの裏作等を最大限に活用した低コスト経営を目指している。
・地域肉用牛農家と酪農家でコントラクター組織を設立し、飼料作物の受託作業を行っている。
また、コントラクター組織で飼料用サトウキビの利活用に取り組んでいる。

6 今後の目標
・後継者の経営と併せて150頭規模に拡大。現在家族経営だが、年間雇用できる体制を整えたい。

【経営発展の経過】

【キーワード】
事業・資金活用、コントラクター
資金繰り、後継者確保

S55年 20歳で就農
S57年 結婚を機に父親より経営分離、父親より肉用牛1頭譲り受ける
JA貸付牛等を活用して徐々に増頭
S60年 農業近代化資金を活用して20頭規模の牛舎を建設
H2年 農業近代化資金を活用して30頭規模の牛舎を建設
H8年 町事業を活用して30～40頭規模の牛舎を建設
自家保留を中心にJA預託牛を活用して増頭
H22年 後継者が融資型補助事業を活用して牛舎建設を行い経営を開始
H27年 畜産基盤再編総合整備事業を活用して牛舎建設

【経営発展の過程で苦労した点】

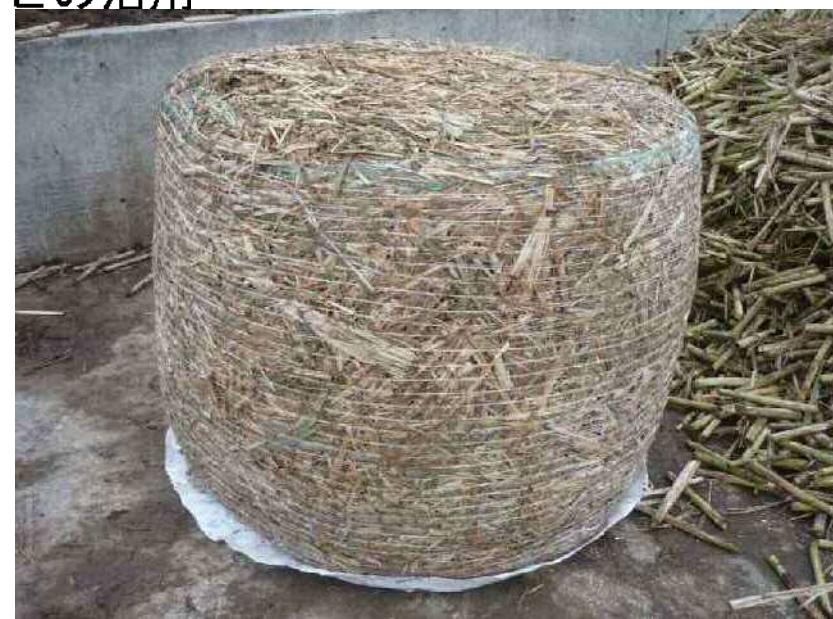
・規模拡大するときに飼料畠を確保することに苦労したが、当時受託作業をしていたおかげで、廃業する委託者から畠をそのまま譲り受けることができた。
・牛舎を建設した直後は資金繰りに大変苦労した。JA預託牛をうまく活用して資金繰りを行った。
・50頭規模になるまでは、作業体系や資金繰り等苦労したが、50頭規模以上からはスムーズに増頭ができた。



飼料用サトウキビの活用



補助事業を活用した牛舎



ラップサイレージ後の飼料用サトウキビ

繁 - 23

【キーワード】

粗飼料全量購入、段階的規模拡大
省力管理システム、衛生対策(細霧装置)

【経営概況】

1 経営形態
肉用牛 繁殖経営

2 構成(労働力)
本人、本人の妻、息子、息子の妻(計4名)

3 飼養頭数
繁殖雌牛150頭

4 飼料作物
粗飼料全量購入、飼料畑なし
※稲WCSは全て肝付町内購入

5 経営の特徴
・粗飼料全量購入、哺乳ロボットによる作業の省力化
・機械装備はボブキャットとロールクラブのみ
・12~6月は焼酎粕を給与
・細霧装置による牛舎消毒と、センサー式自動消毒装置による車両消毒の実施
・堆肥は町内の堆肥センターへ持ち込み

6 今後の目標
・現在の規模を維持しつつ、計画的な母牛の更新と疾病等の早期発見・早期治療の実施
・施設の老朽化に備え、計画的な補修・建て替え

【経営発展の経過】

S40年 人工授精師として起業。
S60年 繁殖農家の減少を見越し、繁殖雌牛(4頭)の飼育を開始。
H 3年 ショベルカー等を購入し、自分で畜舎を建設。(自己資金)
H 4年 繁殖雌牛を30頭規模に拡大。(自己資金)
H13年 繁殖雌牛30頭規模の分娩舎を建設。(補助事業)
H14年 繁殖雌牛80頭規模の牛舎を増設し、110頭規模の牛舎へ。(自己資金)
H16年 BSE発生に伴う子牛価格の低迷の際、150頭規模に拡大。(自己資金)
H19年 労力軽減のため、哺乳ロボットを導入。(補助事業)
H22年 センサー式自動消毒装置を作成し、入場口に設置。
H23年 子牛牛舎に衛生対策として、細霧装置を導入。(自己資金)
H24年 輸入粗飼料の高騰のため、肝付町内産の稲WCSの購入を始める。
H26年 哺乳子牛の個体管理を目的とする運動式スタンチョンを作成。

【経営発展の過程で苦労した点】

・30頭規模に拡大した際、親牛の受胎不良や子牛の疾病等が続き苦労したが、家畜保健衛生所に血液検査を依頼し、栄養状態を見直すことで改善できた。
・飼料価格の高騰が続いているので、コスト削減のために栄養値を計算し、他メーカーへ変更したが、飼料が合わず母牛の疾病が増えたため、初期の飼料に戻した。

センサー式自動消毒装置

車両消毒中



母牛舎



自己資金や補助事業により、牛舎を増設した。

子牛牛舎



噴霧ノズル



細霧装置を用いた衛生対策を実施している。

粗飼料



全購入することで作業の省力化を実現している。
※稻WCSは全て肝付町内産を購入

【経営概況】

1 経営形態

肉用牛 繁殖経営

2 構成(労働力)

本人、妻、長男、次男、臨時雇用1名

3 飼養頭数

繁殖雌牛165頭

4 飼料作物

夏作:飼料用稲(WCS)15ha, トウモロコシ4ha

冬作:イタリアンライグラス16ha

5 経営の特徴

- ・哺乳ロボット、細霧装置、分娩監視用カメラを有効利用し、早期離乳・労力軽減を実現。
- ・繁殖管理システムを利用した発育状況の分析。
- ・大型機械導入による、作業の効率化と事業・資金を活用した規模拡大の実現。

6 今後の目標

- ・子牛牛舎を整備し、密飼いの解消による商品性の向上を図る。
- ・飼料用稲(WCS)を中心とした自給粗飼料確保と収穫・調製方法の改善。
- ・自家保留を中心とした計画的な母牛更新(年20頭程度)

繁 - 24

【経営発展の経過】

【キーワード】

事業・資金活用、自給粗飼料確保(稲WCS)
省力管理システム(哺乳ロボット、分娩カメラ)
衛生対策(細霧装置)

S60年	自宅敷地内に古電柱を利用し低コスト牛舎を建設する。 農協の導入資金を利用して、牛5頭から8頭へ増頭して経営を開始。
H4年	降灰事業により、飼料作物収穫調製用の大型機械を導入。
H9年	畜産基盤再編総合整備事業により施設等の整備を行い、40頭規模へ。 水稻複合経営をやめ、飼料作物の作付けを拡大し、粗飼料の確保を図る。
H10～17年	熊本・宮崎方面から繁殖素牛を導入。
H12年	分娩牛舎を建設。(自己資金)
H16年	子牛育成牛舎を建設(自己資金)。70頭規模へ。
H17年	長男が農大卒業後、就農。100頭規模へ。
H18年	次男が農大卒業後、就農。補助事業により哺乳ロボットを導入。
H19年	TMRミキサーを購入。(自己資金)
H20年	補助事業により、子牛牛舎を建設。農協と市の補助を利用して、110頭規模へ。
H23年	自動細霧装置、循環型温水給与装置を設置。自作の分娩カメラを設置
H24年	子牛牛舎を建設(自己資金)。130頭規模へ。
H25年	農場環境衛生コンクール受賞。
H26年	増頭を重ね、160頭規模へ
H27年	育成牛舎を建設中。

【経営発展の過程で苦労した点】

- ・平成9年の畜舎建設の際、用地確保のための交渉が最も苦労した。

早期離乳・労力軽減の実現

哺乳ロボットの活用



細霧装置の活用



循環型温水給与装置



・冬季の子牛用
飲用水に利用。



自作の分娩監視WEBカメラの利用

・パソコン、スマートフォン、
タブレットで見ることができる。
・持ち運びが簡単で、移動が可能。

作業の効率化の実現

TMRミキサーの活用



・給与作業の体系化。

大型粗飼料作機械の活用

・基盤整備が行われ、大型機械の利用が可能になり、
作業が体系化された。

多頭に対応した情報・経営管理

繁殖管理システム(ソフト)の活用



・繁殖、子牛データの管理。

パソコンによる複式簿記記帳

繁 - 25

【経営概況】

1 経営形態

肉用牛 繁殖経営

2 構成(労働力)

本人、妻、常時雇用1名

3 飼養頭数

繁殖雌牛170頭

4 飼料作物

夏作:ローズグラス、スーダン 4ha, WCS 1ha

冬作:イタリアン、エンパク 5ha

5 経営の特徴

- ・哺乳口ボット、細霧装置を有効利用し、早期離乳・労力軽減を実現。
- ・徹底した観察を実施し、発情・疾病等を作業日誌に記載し、情報の共有化を図っている。
- ・計画的更新の実施(年間15%程度)。

6 今後の目標

- ・200頭規模を実現するため、子牛育成牛舎を増設し、ストレス軽減による疾病予防を図る。

【経営発展の経過】

【キーワード】

事業・資金活用、段階的規模拡大
省力管理システム(哺乳口ボット)

S60年 農業大学校卒業後、父の後継者として就農(繁殖雌牛5頭+露地野菜)

S63年～ 近代化資金等を活用して、牛舎を整備し、繁殖雌牛25頭規模に拡大
以降、自己資金で牛舎整備し、計画的に規模拡大を図る

H5年 農業改良(後継者)資金により、繁殖雌牛20頭を導入し、45頭規模に拡大
バレイショ200a、インゲン50aとの複合経営

H7年 人工授精(自家授精)を開始、繁殖雌牛60頭規模

H13年 農業改良(後継者)資金を活用し、95頭規模まで拡大
父から経営移譲

H15年 哺乳口ボットや細霧装置を導入し、繁殖雌牛100頭規模に拡大
バレイショ栽培中止

H16年 自己資金で130頭規模に拡大、インゲン栽培中止し、専業経営へ

H18年 自己資金により繁殖牛舎を整備し、170頭規模に拡大

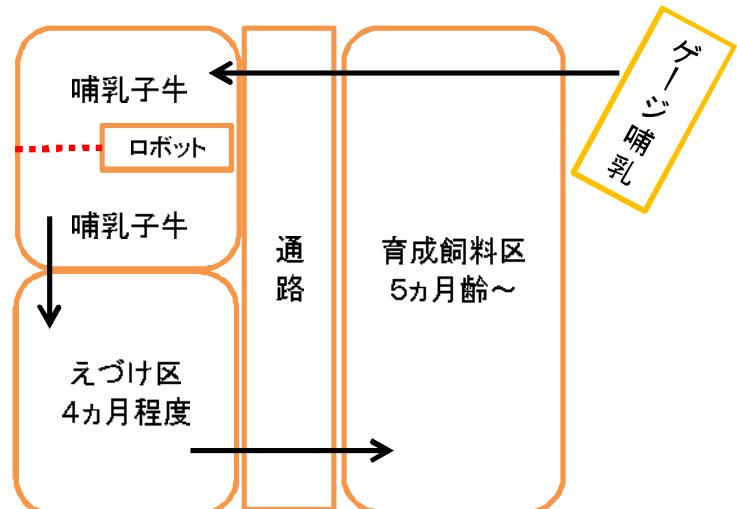
H21年 県指導農業士に認定され、新規就農者等の育成支援

H25年 衛生対策として、消毒用の煙霧機を導入

【経営発展の過程で苦労した点】

- ・50頭以上への増頭の際に、頭数に応じた管理ができず苦労した。
- ・哺乳口ボット導入により早期離乳(1週間)を開始した当初、哺乳子牛の群管理に慣れず、疾病等で苦労した。また、季節の変わり目等疾病が多くなる時期もあったことから担当獣医と相談し、農場用のワクチンプログラムを確立し、細霧装置の導入により改善された。

□ 哺乳～出荷までの流れ



□ 哺乳牛舎



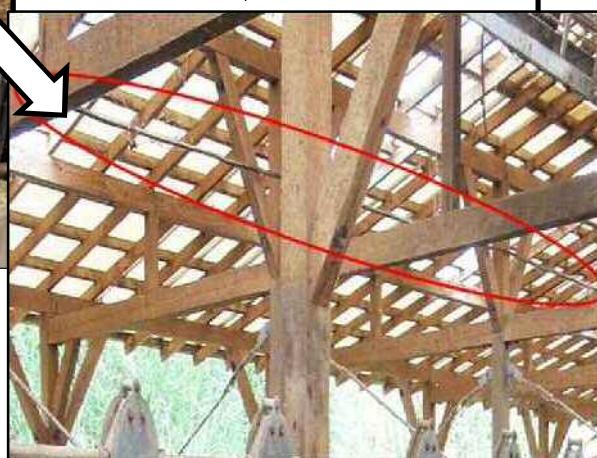
- ・哺乳ロボットを活用した省力化。
- ・敷料交換は、週1回、状況を見て清潔な状況を維持。
- ・作業日誌に疾病や細かな異常を記載し、家族・従業員と情報共有化を図る。

□ 子牛育成牛舎



細霧装置を用いた衛生対策を実施
【細霧稼働パターン】

- ・2回／日(10:00, 15:00)
1~2分間 細霧(季節により調整)



煙霧器を用いた衛生対策を実施
現在は、2週に1回程度実施
牛舎をカーテンで閉め切った状態で
実施

【経営概況】

1 経営形態
肉用牛 繁殖経営

2 構成(労働力)
本人夫婦、長男夫婦 4名

3 飼養頭数
繁殖雌牛200頭、種雄牛2頭

4 飼料作物
夏 作:スーダングラス4ha、ヒエ6ha
冬 作:イタリアン12ha

5 経営の特徴
・繁殖牛へのTMRの1回／日給与による省力管理。
・繁殖牛のステージ別管理による年1産の実現。
・哺乳ロボットとカーフゲージを併用した適正哺育管理。
・子牛の出荷日齢の早期化。
・自給粗飼料と稻わらを活用した低コスト経営。
・部門別分担制による管理の強化と、防疫面の充実。
・1頭毎の診療カルテを整備した衛生管理の充実。
・種雄牛2頭飼養。

6 今後の目標
・繁殖部門の拡大と肥育部門を加えた一貫経営の導入。

繁 - 26 【経営発展の経過】

【キーワード】

事業活用、自給粗飼料確保、後継者確保
空き施設(豚舎)有効活用、省力管理システム

S54年3月	畜産講習所卒業。
S54年4月	就農。両親の元で研修開始。繁殖牛4頭。 自己資金や自家保留で増頭。
H14年	JA豚舎跡地を購入し、牛舎へ改築。繁殖牛70頭規模へ拡大。
H18年6月	経営を法人化
H19年3月	長男が農業大学校を卒業→就農。
H21～22年	畜産基盤再編総合整備事業を活用し畜舎(哺育舎、繁殖牛舎)、 堆肥舎整備、飼料畑造成→繁殖牛120頭規模へ拡大。 自己資金や自家保留で増頭。
H26年3月	長男結婚→4人体制
H26年8月	繁殖雌牛200頭へ規模拡大

【経営発展の過程で苦労した点】

- ・人工哺育(哺乳ロボット)等の技術を習得することで、下痢等の発生防止と早期治療が図られた。
- ・関係機関の指導に取り組み、子牛飼養管理技術が向上し、出荷月齢の早期化が図られた。
- ・自給粗飼料生産は、天候等に左右されるとともに、狭い圃場が散在し作業効率が悪い。
- ・国内BSE発生(H13)と口蹄疫発生(H22)時期の価格低迷期に規模拡大を図ったことで導入経費が抑制され、その後の回復期に子牛が販売できた。
- ・情報収集や効率的な経営手法の確立に努めた。



繁殖牛舎:ステージ別管理



ミキサーフィーダーでロール給与



ロール置場



育成牛舎



離乳後の育成管理



哺乳ロボット

【経営概況】

- 1 経営形態
肉用牛 繁殖経営
- 2 構成(労働力)
長男夫婦+父親夫婦、二男夫婦、三男夫婦(農作業5名)
それぞれの経営は独立しているが、家族内協業を行う
- 3 飼養頭数

繁殖雌牛(長男夫婦)	86頭	} 合計220頭
(二男夫婦)	83頭	
(三男夫婦)	51頭	
- 4 飼料作物
夏作:ローズグラス29ha
冬作:イタリアンライグラス29ha
- 5 経営の特徴
 - ・子牛価格高騰時は自家保留による更新にとどめ、子牛価格低迷時に導入、規模拡大を図る
 - ・1年1産のためのステージ毎の群管理と記録記帳の徹底。
畜舎の衛生対策とワクチネーションの実施
 - ・飼料作物の栽培、収穫機械は3経営体で共同利用。
- 6 今後の目標
 - ・土地を生かして良質な牧草を生産し、健康な子牛を育てる。

繁 - 27

【経営発展の経過】

【キーワード】
低コスト生産、事業・資金活用省力化、後継者、共同経営

- | | |
|------|---|
| S41年 | 父K氏農業高校卒業後就農(就農時は軽種馬、甘しよ、陸稻、園芸) |
| S50年 | 結婚を機に繁殖牛7頭による子牛生産開始 |
| H元年 | 他作目を中止、繁殖牛専門経営となる 繁殖牛40頭 |
| H3年 | 簡易牛舎手作り(町補助事業活用) |
| H5年 | 省力化・昼間分娩のため成雌牛への1日1回給与を開始 |
| H6年 | 焼酎粕の給与開始 |
| H8年 | 飼料調製をロール体系とし、ラップサイレージ給与開始
人工哺育開始 |
| H10年 | 夫婦間で家族経営協定締結(H16年に夫婦・長男間で再締結) |
| H12年 | 二男が派米研修を終え就農 |
| H13年 | 補助事業活用により土地造成、農業機械整備、堆肥舎建設 75頭 |
| H14年 | 二男が「新規就農円滑化モデル事業」活用し40頭規模で経営開始
長男が会社を退職し就農 |
| | 農林水産祭農林水産大臣賞受賞 |
| H15年 | 農林水産祭天皇杯受賞 |
| H22年 | 三男が就農、「新規参入円滑化等事業」活用で50頭規模で経営開始 |
| H25年 | 父親夫婦から長男夫婦に経営移譲 |

【経営発展の過程で苦労した点】

- ・平成元年、40頭繁殖牛専門経営となるまでは資金面で苦労。可能な限り経費を抑えることを工夫し実践した。
- ・長男、二男が就農するまでは飼料収穫時期は夜遅くまで作業を行った。
- ・規模拡大時に粗飼料が不足し、対策として焼酎粕を給与。

低成本



省力化



事業活用

